



平成22年11月1日

卓話 『青少年交換プログラムで フランスへ派遣していただいて』

青少年交換委員会(ROTEX)

清水 裕花 様



私が留学したのはもう3年も前、高校2年から3年にかけてです。ロータリーの青少年交換プログラムでは、一般にいう留学が「小さな親善大使の派遣」と呼ばれています。派遣ということなのでスピーチの仕方や礼儀作法など1年間の研修があります。当時、この研修がどう自分の力になるんだろうと思っていたのですが、留学中、本当に力になりました。

私が派遣されたのはツールという町で、16世紀、ルネッサンス時代に栄え、沢山のお城が残っている本当に素敵な町でした。私は4つのホストファミリーにお世話になりました。どのファミリーにも優しく迎えていただき、本当の家族のような関係になりました。今も連絡を取り続けています。学校では高校2年生のクラスに入り、ここでも温かく受け入れられました。これ以外にも様々な国の留学生との出会いがありました。こうした出会いは私の中でとても大事なものとなっています。

フランスの生活でとても好きだったのは市場です。市場で買い物をすると必ずお店の人との会話が生まれます。私はそれがとても好きでした。私はフランスでの1年を毎日毎日いろんな発見をしながら過ごしましたが、同時に日本についてのプレゼンをホストクラブや学校で行ったり、友達に折り紙や日本語を教えたりもしていました。そんな中で私と会って日本に興味を持ったという子がいるととても嬉しく思いました。

私が吸収したフランス文化とは何だったのか、これは私が留学中からずっと疑問に思っていたことです。帰国当初、フランス文化について話をするとき、先ほど挙げた市場のことや

パンやチーズの食文化など具体的な話ばかりしていました。それだけでなく、私は何かもっと別の大きなものを身に付けていたと感じていたのですが、それが何のかうまく言い表せずにいました。それが今になって分かるようになったところがあります。

例えば学校の授業体制。日本で言う造形芸術の授業は、私は最初、日本での美術の授業と同じように考えていましたが、この授業に一番苦しました。日本では何か明確なテーマが与えられ、絵とか彫刻とかの表現方法も決められますが、フランスの造形芸術の授業はテーマは与えられてもその解釈の仕方も表現の仕方も自由で、だから全部自分で考え、理由をつけて自分の表現をしなければいけないのです。その体制を私は受け入れられずに悩んでいたのですが、授業の考え方方が日本とは全く違っていることに気付いたとき、面白いかも知れないと思えるようになりました。そういうことがあって、私はこれが違った文化を受け入れるということなのだなと、今は感じています。

私は留学の時期にも意味があると感じています。高校生という時期に行くことで比較的簡単に文化を受け入れられ、視野が広くなる。高校生の時期にそれを体験したからこそ、今の私に生きているのだと思います。

ありがとうございました。

